

模合から見る沖縄社会

遠藤 綾

1. はじめに

模合という言葉を知ったことがある人はどのくらいいるだろうか。本土の人間にとっては馴染みのない言葉だが、沖縄の人々にとっては誰もが知っているものである。わたしも沖縄へフィールドワークに行く前は全く知らなかったのだが、ある本でこの言葉を見つけ、インターネットで検索してみたところ、5万件以上もヒットした。その中でも模合という言葉はブログなどの個人の日記に多く登場していて、その時点においても模合が沖縄の人々の日常に密接したものであるということが感じられた。模合とは本土における頼母子講・無尽講と呼ばれるものと同類の慣行で、金銭の相互扶助を行うものである。

模合についてはこれまで多くの研究がなされているが、今回は比較的触れられていない模合の不安定な側面について特に焦点を当てることにした。また、今回の調査で、模合に用いられる模合帳というものを頂く機会があったのでそれについても取り上げたいと思う。

2. 模合とは

模合について『日本民俗大辞典』には、「沖縄における頼母子講・無尽講の一種で、普通ムエーと称される。親睦を目的とするものや知人・友人の苦境を手助けする個人的なものから企業の資金調達にまで用いられる。個人的な場合は通例、一月に一回、五千円から三万円程度の金額が多い。人数も普通十人前後である。今日では金銭のみが対象であるが貨幣経済が浸透する以前は米や砂糖などの生活用品が主な対象であった。」とある。

頼母子講とは『広辞苑』に「相互的な金融組合。組合員が一定の掛け金をなし、一定の期日に抽籤または入札によって所定の金額を順次に組合員に融通する組織。鎌倉時代から行われた。無尽。無尽講。」とある。

簡単に言うと、月に一度、数人から十数人の知人・友人等が集まり、各自が一定のお金を持ち寄り、その集まったお金を入札によって毎月順々にその中の誰か一人が受け取るという金銭の相互扶助を行うものである。お金を受け取った人はその入札金額を次回から模合が終了するまで毎回払うことになる。そのため、最後の方にお金を受け取る人はより多くのお金を受け取ることになる。

しかし、本来は金銭の相互扶助を目的とした模合だが、現在の沖縄では金銭の相互扶助の側面よりも、親睦を深めることを目的とした模合が多く行われていることや、実際模合によって様々なルールがあることが今までの先行研究で紹介されている。そ

して、そういった模合は飲食と共に行われることが多い。

また、先行研究（生地 2001）において、模合の構成員は、親族、同郷の人々、学校の同期生、近隣の人々、職場、商店街、同業者、親会社と関連会社、スナックなど飲食店の常連客、趣味の仲間、同じ学校に子供を通わせる親同士、政治家とその支持者、そしてその複数型など多様であると言われており、沖縄のあらゆる立場の人々を結び付けていることが分かる。

3．模合の基本形態

現在の沖縄の人は具体的にどのような模合をどのように行っているのか、今回の聞き取り調査で得られた事例をあげて紹介する。

[事例 1] 那覇市 A 青年会仲間での模合

この模合は青年会仲間で行なっている模合である。一口は 1 万円で、入札ではなく事前の話し合いによってお金を受け取る人を決めていて、お金を受け取った人はその翌月から利子を 500 円つけることになっている。青年会には現在 100 人近くものメンバーが所属しているが、この模合はそのなかの男性の希望者 13 人により行われている。メンバーの年齢は 20 代から 50 代までと幅広い。この模合は、青年会が発足して間もなく始められたもので、現在に至る迄にメンバーが移り変わりながら 30 年ほどもの長い間続いている。親睦が目的で行なわれており、そのため利子がついているものの 500 円と少額である。青年会の女性はまた別に模合を行っているようだ。普段から青年会活動によってメンバー同士の繋がりは強いが、この模合が更なるコミュニケーションの場となっているようだ。

[事例 2] 常連客と同業者との模合：B さん（40 代男性・飲食店経営）

この模合は B さんと那覇市にある B さんの店の常連客と同業者とで行っており、一口は 5 万円で事例 1 と同様話し合いで受け取る人を決め、利子を 2000 円つけることになっている。毎月 10 日に開催され、B さんのお店もしくは同業者のメンバーのお店が会場となっている。

この模合は B さんが始めたものである。B さんはこの模合の他にも親戚の方達と同級生達との 2 つの模合に参加しており、その 2 つの模合は付き合いや親睦の意味合いが強いが、この模合は親睦とともにビジネスの側面も持っている。なぜなら、模合の会合は飲食を伴う場合が多い。そのため飲食店にとって自分の店で模合が行われるということは、毎月模合に伴う飲食による一定の売り上げが約束されているということだからである。また、常連客と深い人間関係を結び、長い付き合いを望める。さらに、この模合は同業者との情報交換の場ともなっている。そういったメリットも手伝って、このように飲食店を行っている人が模合を始めることは多くみられるようだ。

この他に、中学の同級生5人で若い時から模合を行っており、続けていくうちにみんな結婚したので、それぞれの奥さんも一緒に模合に参加しているという方もいた。現在では年に数回子供たちを含めてアウトドアに行くなど、家族ぐるみの付き合いにも発展しているようだ。

また、ある方は結婚式に知らない人が出席しており、その人は父の模合仲間だったという人もいた。このように模合仲間の人間関係はとても深く、また、模合は人間関係を広げることに有効であることが分かった。

4. 模合帳と E-moai

4.1 模合帳

模合を行う場合、その模合の内容実態管理を行わなければならないのだが、沖縄にはそれを記載する専用の模合帳というノートが存在することがわかった。模合帳は普通に文具店などでノートの一つの種類として売られており、簡単に手に入れることができる。このことから模合が沖縄においてポピュラーな存在であることがわかる。

幸運にも事例1で紹介したA青年会の方から、青年会で前回使用した模合帳を頂くことができた(図1・2:モザイク部分は筆者による)。「どうしぐあ~もあい帳」というものである。「どうしぐあ~(同土小)」とは沖縄の言葉で友達という意味である。頂いた模合帳はめくって初めに模合規約と書かれた、地区・日時・一口の金額を記載するページがあった(図3)。この青年会では何も記載していなかった。



図1 模合帳表紙



図2 模合帳裏表紙

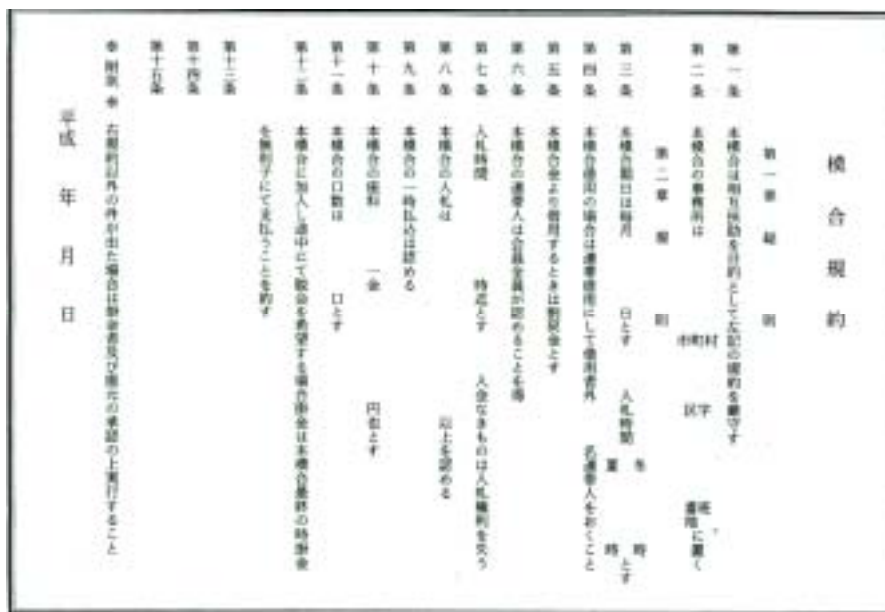


図3 模合規約ページ

次から図4（モザイク部分は筆者による）のページになり、上部の小さい欄には日付と斜線などが記してあり、下部には名前が記してあった。模合帳への記載方法は模合によって様々なようであるが、この青年会ではお金を受け取らないで1万円を出したことを斜線で表し、お金を受け取ったことを斜線の半分を黒く塗って表し、それ以降利子をプラスした1万500円を出したことをバツ印で表していた。

後の方には、連帯借用金証書欄があり、日付と受け取った人の氏名・金額を記録するページになっていた（図5：モザイク部分は筆者による）。未納者がいた場合、氏名や金額が空いているところにメモされていた。

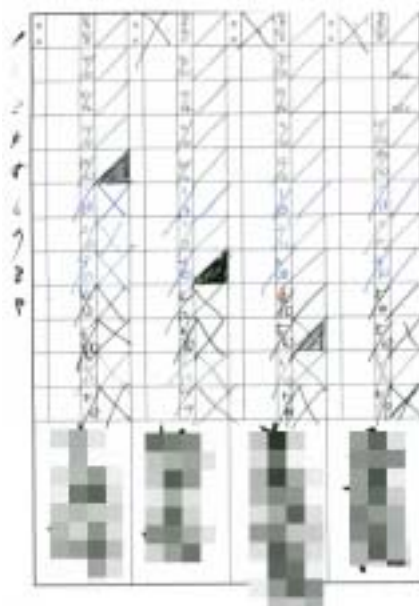


図4 模合帳記録欄



図5 連帯借用金証書欄

4.2 模合帳の電子化 E-moai

模合には欠かせない模合帳だが、近年になって新しい動きが起きている。2006年11月、インターネット上にE-moaiというサイトが登場したのである。このE-moaiとはSNS(ソーシャルネットワークサービス)の基本機能である「日記」「コメント書き込み」「コミュニティー作成」などの機能に加え「moai帳」の機能を持ったサイトである。この「moai帳」機能は、先に紹介したノートの模合帳と同じ役割を果たすことができる。それに加えてこのサイトでは模合に役立つ様々なサービスを提供している。



図6 E-moaiのサイトトップ

ひとつは、E-moaiのサイト上には飲食店のリンクが多くあり、模合の場所探しや予約を行うことができるということである。また、模合の開催日時や連絡が一斉送信でき、その返信情報をメンバーで共有することができる。さらに、現在の模合の状況を確認できるだけでなく、過去の模合のデータを保管しておけるので、それをメンバーだれも見ることができ、模合に関する情報が共有できる。

また、模合帳はその日に忘れてしまったり、なくす心配もあるが、E-moaiは24時間パソコンからもケータイからでも接続でき、なくす心配がないというメリットもある。

こうした取り組みが行われていることから、模合は沖縄において関心の高い流動的な存在であることが窺える。現在の実際の利用の状況は確認できないが、模合に関係する煩雑な手間が減ることで、気軽に模合を始める人が増えるかもしれない。

5. 模合の裏側

5.1 模合崩れ

模合は楽しいものであり、だからこそ親睦目的の模合が多く行われているのだが、模合も必ずしもいい面ばかりを持っているわけではない。模合はお金が絡むものであるため、そこには常に信用とともにリスクも存在している。模合はメンバーが本当に信用できるかどうかを見極めたうえで行うのが普通である。しかし時に、誰かのお金の持ち逃げや不払いが発生することがある。そうして模合がうまくいかなくなることを、模合が崩れると表現する。

今回の調査中、インタビューを進める過程で模合にはそういった面もあるということを経験し、必ずと言っていいほど聞いた。実際に模合崩れを体験した人の事例を紹介する。

[事例3] 同級生模合：Cさん(30代男性・理髪店勤務)

この模合崩れはCさんが一年前に体験したものである。Cさんは中学の同級生

14人で一口一万円の模合を行っていて、始めてから7年目になっていた。この模合では入札ではなく事前の話し合いによってお金を受け取る人を決めるルールだった。その月受け取る予定だった人が、その模合に参加できなかったため、他のあるメンバーに、代わりにお金を預かってもらった。そして、後でそのお金を渡してもらおうとしたところ、そのメンバーが「模合のお金を落とした」と言い、受け取る予定だった人に渡さなかった。後から分かったことだがそのメンバーは実は自己破産していてお金に困っていたらしい。これはにより模合が崩れてしまった。これは二人のメンバーの間で起こったトラブルだが、Cさんはこれをきっかけに不信感を持ちこの模合を抜けた。

[事例4] 同級生模合：Dさん（30代男性・理髪店勤務）

この模合崩れはDさんが一年前に体験したものである。Dさんは友達同士10人で、一口は1万とし親睦目的の模合を行っていた。しかし、3回目の時にお金を受け取った人が、そのお金を持ってすぐに何も言わずに内地（本土）に季節労働に行ってしまった。そのためその人は翌月からの模合金を払わなかった。そのため模合が崩れてしまった。季節労働から帰ってきたその人は、後でみんなにお金を返し、他のメンバーと個人的な付き合いは続いているが、このことで信頼を失ってしまったその人は、もう模合には参加させてもらえないそうだ。

5.2 持ち逃げ屋

インタビューしている中で、ある方が持ち逃げ屋と呼ばれる存在について話してくれた。持ち逃げ屋とは、その名の通り模合のお金を持ち逃げする人のことである。持ち逃げ屋はまず、空き店舗を見つけそこを借りて比較的始めるのが易しい小さな飲食店などを始める。その店を運営していく中で信用を築き、人を集め模合を始める。そして、その模合で自分がお金を受け取るとそのお金を持っていなくなるというスタイルだ。お話ししてくれた人は那覇市内の市場で精肉店を営んでいる方であり、市場内には空き店舗がいくつかあるが、その空き店舗でそういったことが何度かあったらしい。持ち逃げした場合、閉店した後にその店に度々人が訪れるので市場内にいれば持ち逃げしたのだらうと分かるそうだ。その持ち逃げした人すべてが最初から持ち逃げする目的だったのか、どうしてもお金に困った末持ち逃げしたのかは確かめられないが、空き店舗は簡単に借りることができ、また引き払うことも簡単なので、そういった形で持ち逃げを行う“持ち逃げ屋”は存在するのではないかと思われる。

5.3 詐欺化した模合

先述の模合崩れよりももっと悪質で故意的な、模合という名目で行う詐欺事件が起きていることが分かった。調査2日目の9月5日付けの琉球新報朝刊の第一面に大きくある事件が取り上げられていた（写真1）。その事件とは、高利配当をうたい「模合」

と称して多額の出資金を募った団体が配当を滞らせ、団体代表が行方をくらませ、刑事告訴されたというものだった。出資金は累計 20 億円で、出資者は 500 人近くに上る大規模な詐欺容疑事件である。



写真1 2007年9月5日付『琉球新報』



写真2 事件の模合現場となった喫茶店

以下にこの事件の経緯を簡単に整理しておく。

この模合は 2004 年頃に一口 100 万円で始められた。

高利配当をうたい口コミで会員を増やしていった。

しかし、2007 年に入り、他に高配当の団体が設立され新たな出資者がその別団体に流れた。そのため、出資者を増やすことができなくなり資金繰りが滞り始めた。

同年 5 月、再度高利配当を約束し再度出資を募る。

同年 6 月、遂に配当停止。団体代表が家族とともに行方をくらます。

沖縄ではこのように 2007 年に入ってから「模合」の名目で億単位の出資金を集め、配当停止や破たんにいる団体が今回の件を含め 4 団体確認されている。これらの模合は新たな加入者が出資することで初期の出資者が配当を得る仕組みになっていて、模合とは名ばかりで口コミで出資者を増やす、言わばねずみ講に通じるようなものだった。出資者は、一つの団体が破たんするとその損失をとり返すために同じことを繰り返す、という悪循環に陥っている人が多いという。

調査中、驚いたことにこの事件の模合が行なわれていた喫茶店に偶然遭遇した（写真 2）。この喫茶店は国道の大きな通りに面しており、マンションの 1 階部分を使っていた。

隣の飲食店の方によると、この事件になった模合が行なわれていた頃は、この喫茶店に一日に入れ替わり立ち代り何百人もの人が出入りしていて当時はとても騒々しかったということだった。そのため、その人たちによる路上駐車がひどく、近辺の店の駐車場にも勝手に車を止めていてとても迷惑していたと話してくれた。

事件発覚後は喫茶店が静かになり、目の前の通りも平穏を取りもどしていたが、見ていると、複数の人たちが車でこの喫茶店にやってきてはしばらくしてすぐに帰っていくのが何度か見られた。この模合に参加した人たちであり、喫茶店の様子を見に来たり、今後について話をしに来たのだろうと思われた。

模合金を持って逃げた経営者は空き店舗だったこの喫茶店を借り営業を始めた。そしてまもなく会員制という張り紙を出したそうだ。普通の人が入りにくい雰囲気を利用客はほとんどその会員の人たちだったそうだ。つまり、初めの頃から詐欺模合をすることが目的だった可能性が高いと考えられる。

また、こういった利潤目的らしい模合が他にも近くで行われているようだということを知ったので、その場所を見に行ったところ、そこはまたしても喫茶店であった。その喫茶店は、1階は歯科医院、2階はアロマルーム、3階から5階は企業の事務所が入っている6階建てのビルの最上階に位置しており、外から見ただけでは一見喫茶店があるようにはとても見えなかった。見た目もさることながら、ビルの6階に位置していることから、その存在を知っている人でなければ、まず行くことのない喫茶店だった。

もしかすると、沖縄には、こういった人目につかない場所で怪しい詐欺的模合が行われている裏の世界があるのかもしれない。

6. おわりに

今回の調査で、インタビューにより、模合は幅広い世代で盛んにおこなわれているということが実際に確認できた。そして、そのほとんどが金銭の相互扶助よりも親睦を目的としたものであり、沖縄の人々の関係を深く結びつけ、時には広げる役割を果たしていることが分かった。模合は信用によって成り立っているが、逆に相手に信用を表す手段にもなっているのかも知れないと思った。

しかし、メンバーの中の誰かの持ち逃げなどによって模合が崩れることも少なくないということも事実である。調査中、昔そういった体験をしたので、模合については話したくないと言われたこともあった。また、一部では模合と称して高額のお金がやりとりされている詐欺事件も見られる。こういった詐欺的模合が発生し、多くの人が巻き込まれてしまうのは、沖縄の人々の繋がりや強さにも関係しているのではないかと考えた。つまり、誘いを断れないような強いネットワークを利用されることがあるということである。金銭の相互扶助の目的よりも親睦を目的とした少額の模合が増えてきた背景には、そういった模合の不安定な面があるということを実際体験した、または耳にしたことの影響が少なからずあるのではないかと考えた。そのため、今後も親睦を目的とした模合が増え、一方では不純な利益を目的とした詐欺もなくならならないのかもしれないと思った。

参考文献

- 生地 陽 (2001)「模合の履歴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第91集 第一法規出版
- 萩原 烈 (1991)「宮国における相助組織 ユズと模合のネットワーク」『文化人類学調査実習報告書』第8輯 国際基督教大学人類学研究室
- 新村出編 (1998)『広辞苑 (第5版)』岩波書店
- 福田アジオほか編 (2000)『日本民俗大辞典 (下)』吉川弘文館
- 『琉球新報』2007年9月5日朝刊

参考ウェブサイト

- 琉球新報ホームページ <http://ryukyushimpo.jp/>
- E-moai サイト <http://www.e-moai.com>